

張
猛
龍
碑

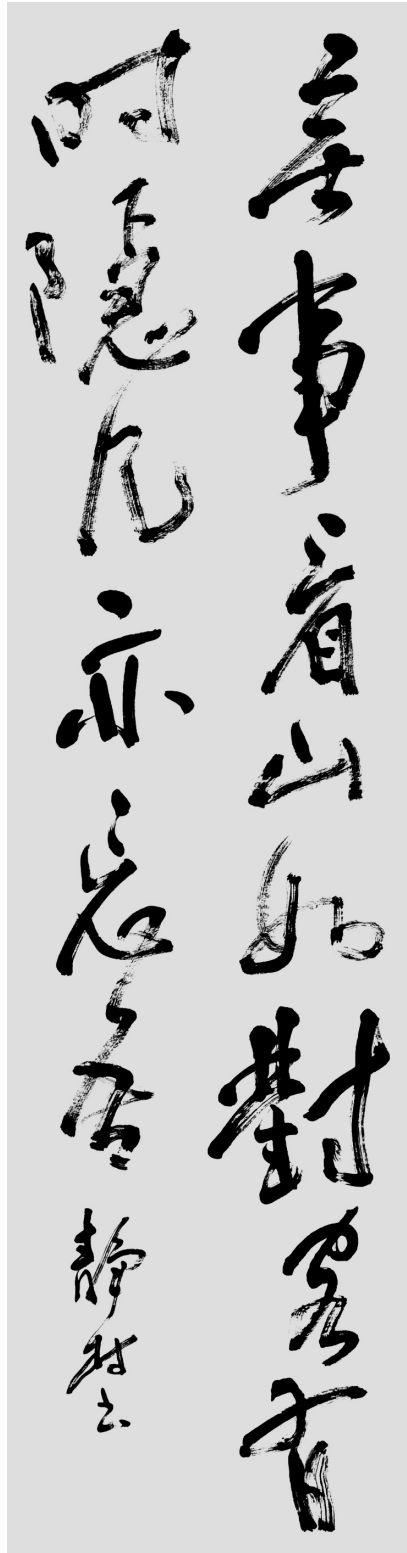


中西中郎將使持節平西將軍涼州刺史瓊之十世孫八世祖軌晉惠帝
※昇試隨意參考（条幅・半紙）としてご活用下さい。抜粋可。

◆注 意 ・裏表紙の昇試規定を参照のこと。

A
鈴木静村書

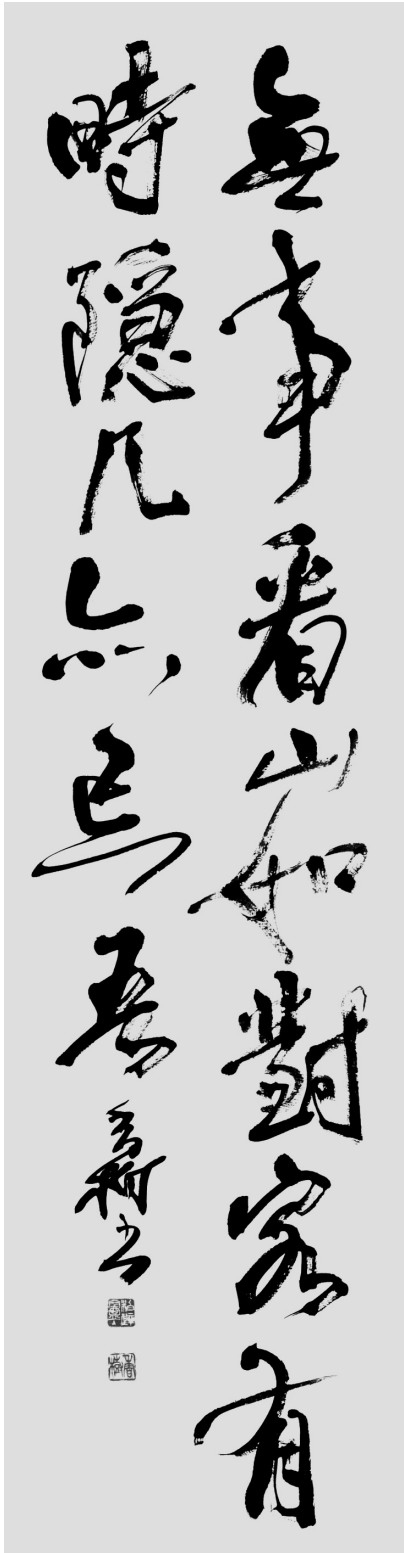
無事看山如對客 有時隱几亦忘吾 (林尚仁)
事無ければ山を見る客に対するが如く、時有りてか几きに隠より亦た吾を忘る。(林尚仁)



B

高橋香樹主幹書

無 左に突き出し、事 タテ画をやや前傾、看・山は前傾画を入れる。對 タテ画は上に強く出し、下部をしめる。客をタテ長に、有は字幅をとり
前傾。時は横長。隱 偏を前傾、旁は大きく、几 第二画目を変化。亦 まず三つの点の変化を、横画は付いて抜き、縦画は傾き長さに変化。忘
稍大きい感、小さくしたい。吾 「口」の末画は離して短くキリッと。



今回は昇段級試験の課題です。行書を中心とし、草書は「客・忘」の二字。連綿線を用いず単体表現としました。連綿しなくても、次字の一画目まで書くことにより意が繋がります。一、二行目の出入りも重ならぬように意を注ぎたい。墨継ぎは「客」と「亦」の二ヶ所。
訳：無事であれば客に対するが如くして山を眺め、時あつては吾を忘れ机によって読書に耽る。

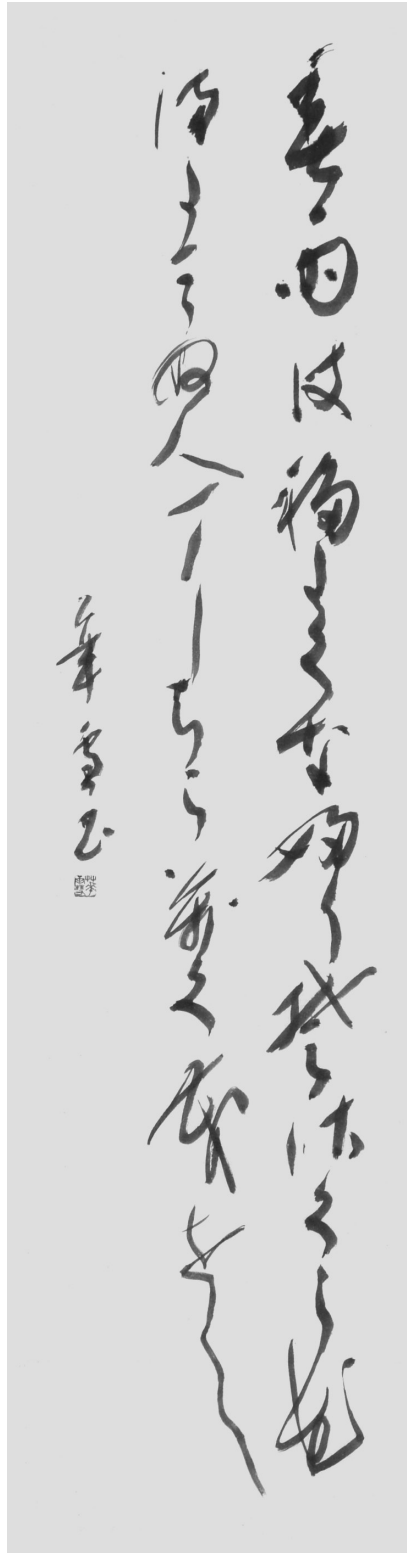
予告 (四月二十二日締切) 湖月林風相與清 殘尊下馬復同傾 (杜甫)

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

A

平岡華雪先生書

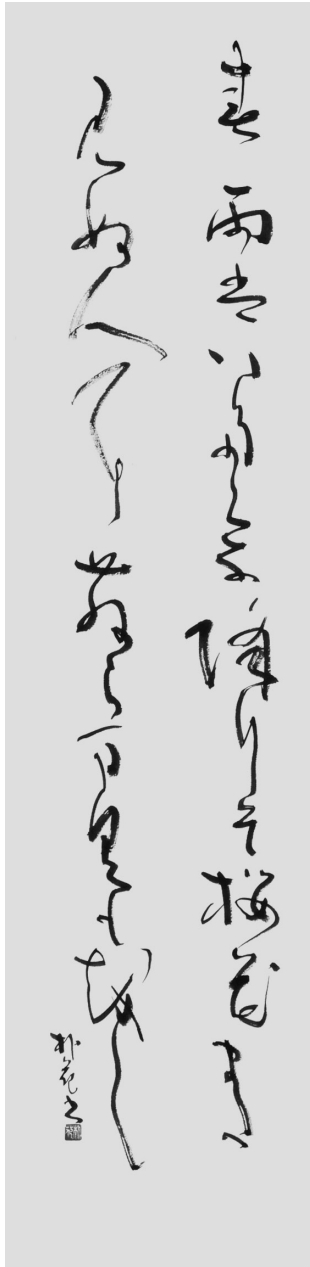
春雨はいたくなふりを桜花まだ見ぬ人にちらまくをし(新古今和歌集 山部赤人)
春雨は移多久な婦り楚佐久ら花満多三ぬ人耳ちら萬久茂をし



B

向山朴花先生書

春雨盤い多久奈降りそ桜花まだ見ぬ人耳散ら万具も越し



山部赤人は、奈良初期の万葉歌人。三十六歌仙の一人。古来、柿本人麿と共に歌聖と称された。

歌は、恋歌や死の歌に見るべきものはなく、自然を題材として謳われた優美で清澄な傑作が多い。その簡潔、清浄な歌風から、代表的自然詩人と言われている。有名な「田子の浦ゆ」の歌は、万葉集の原歌と新古今集にある歌との違いも注目される。

学び方

歌意：春の雨がひどく降るなあ。さくら花をまだ見ぬ人の為に、花の散らむとするのも惜しまれる。

昇級試験にあたり、取り組み易い二行書きで連綿の筆路もわかり易く書いてみました。書き始め「春」は放ち書き、「雨」との間をとり印象を高めました。続く四、三、二字連綿は、いずれも次の字への流れを準備してリズムよく運筆します。「ま多」は二行目に思いを繋げる意味で、やや左寄りにしました。二行目、やや下げた位置から書き始めて上部の余白で明るさを出しました。「見ぬ人耳」は渴筆となり、伸びやかな広がりのある線を表出しました。終句の「散ら万具も越し」で墨を入れて引き締めます。最後、密度の薄い「し」の左に、落款、雅印を添わせて安定させました。

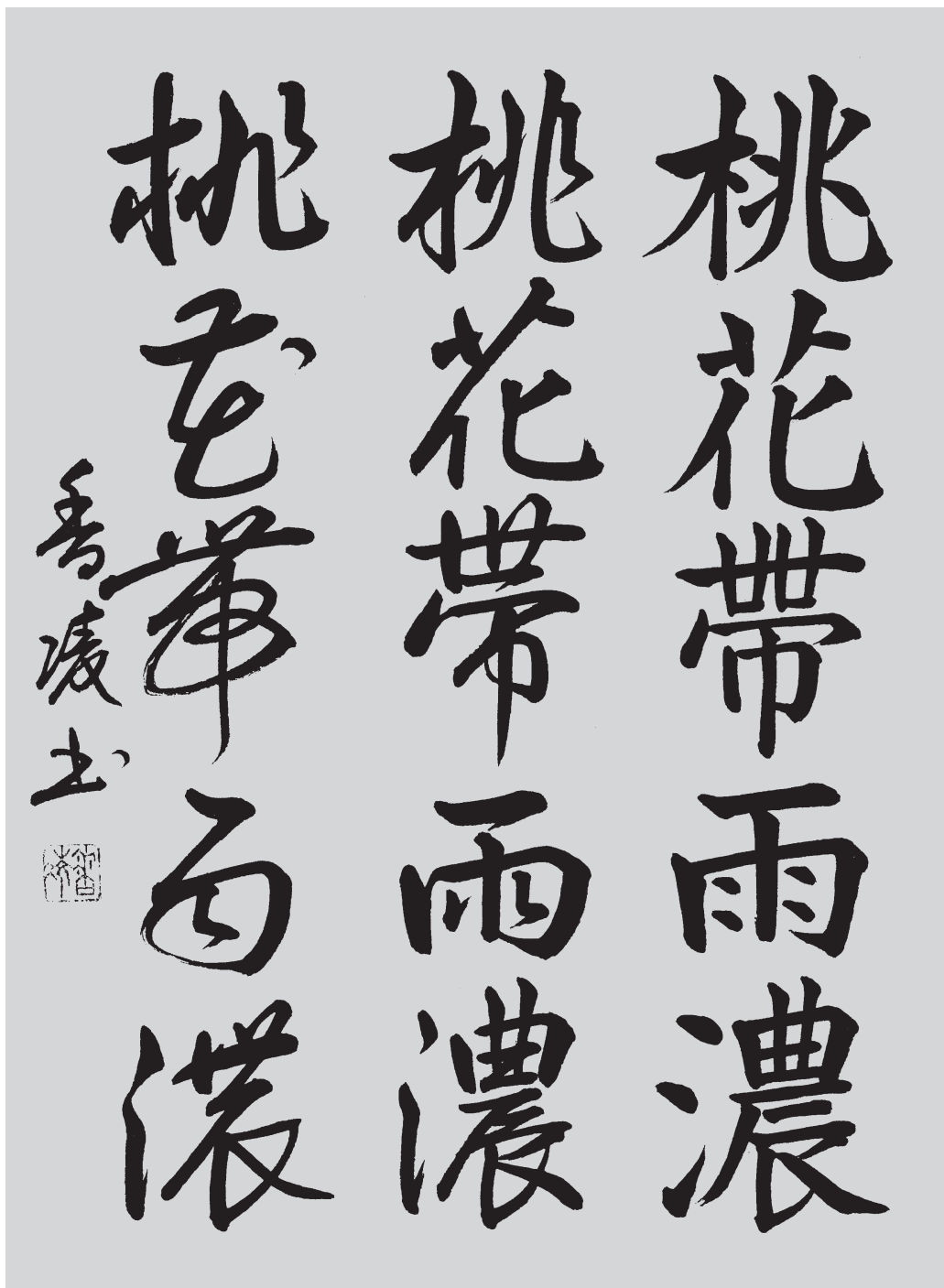
予告 (四月二十二日締切)

花さそふ嵐の庭の雪ならでふりゆくものはわが身なりけり(百人一首)

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

高橋香凌先生書

桃花帶雨濃 (李白)
桃花雨を帯びて濃やかなり。

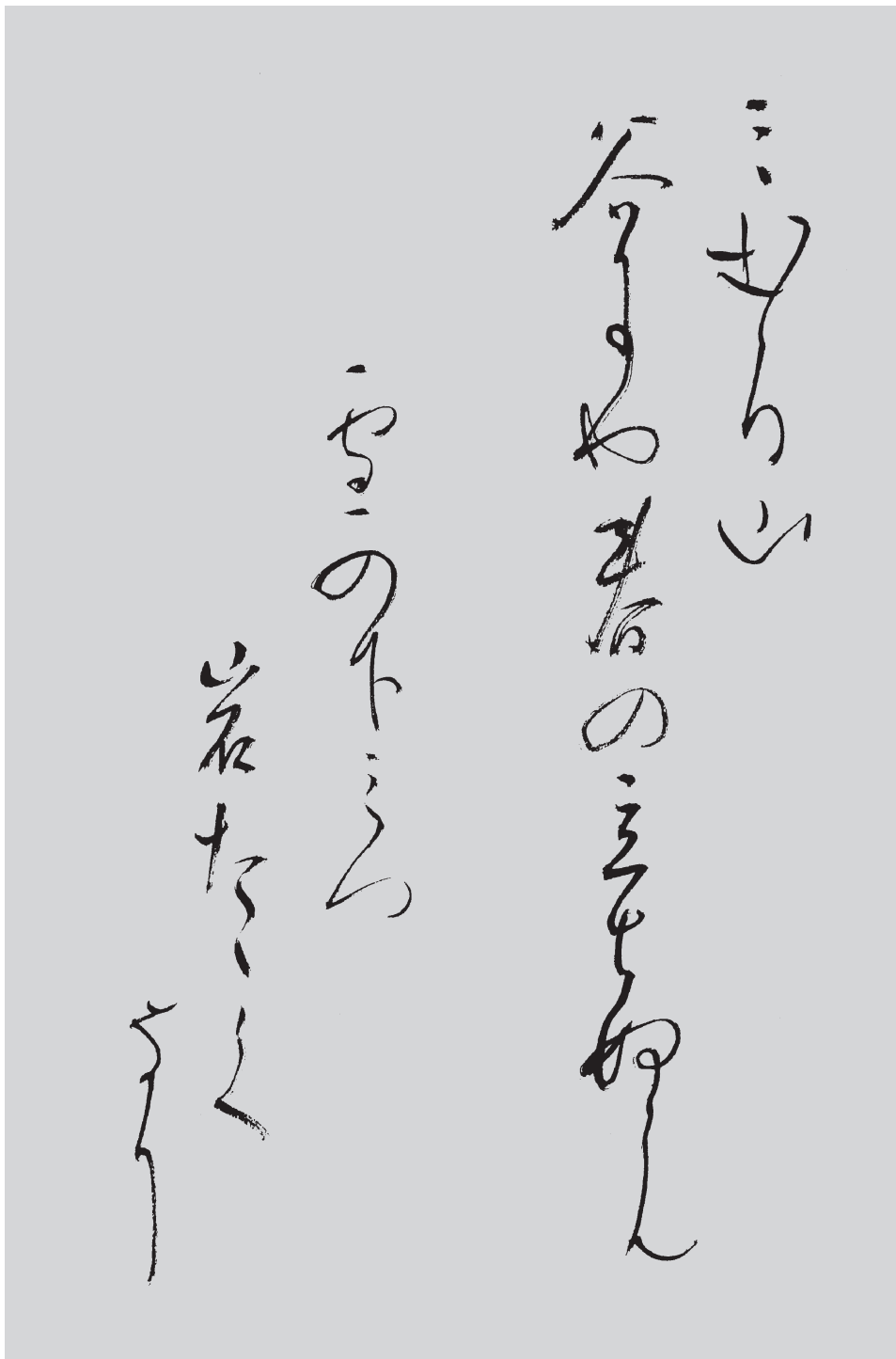


訳：桃の花びらは露に濡れて鮮やかである。

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

高塚竹堂先生書

みむろ山谷にや春の立ちぬらむ雪ゆきの下水みづ岩たゝくなり (千載和歌集 国信)



左余白に落款「○○書」と調和を工夫し書き入れる。

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

平岡華雪先生書

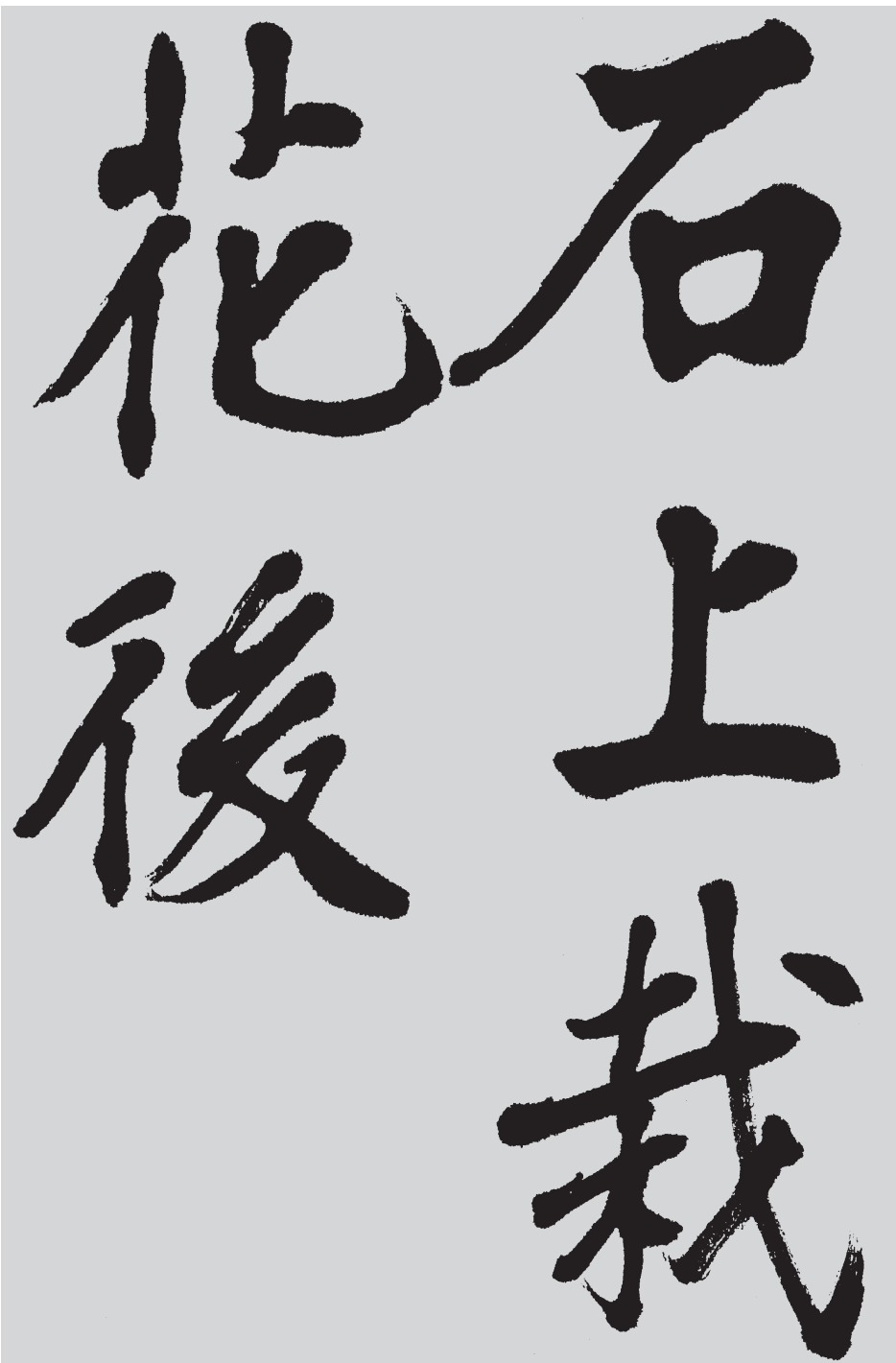
石上花を栽^{うゑ}て後、(生涯共に是れ春) (貞和録)

訳：石上栽花^{うゑ}悟り 悟ってから後は、
(心中平静なる故に、何時も春の心地がする)

〔末画部をのびやかに〕

「栽」の戈法、「花」の浮鷺、「後」の右払い等末画部の用筆は暢びやかにゆとりをもたせたい。特に「栽」は久しぶりの表出、この戈法を迷いなく用筆し、この字を活かしたい。

草冠の書き順



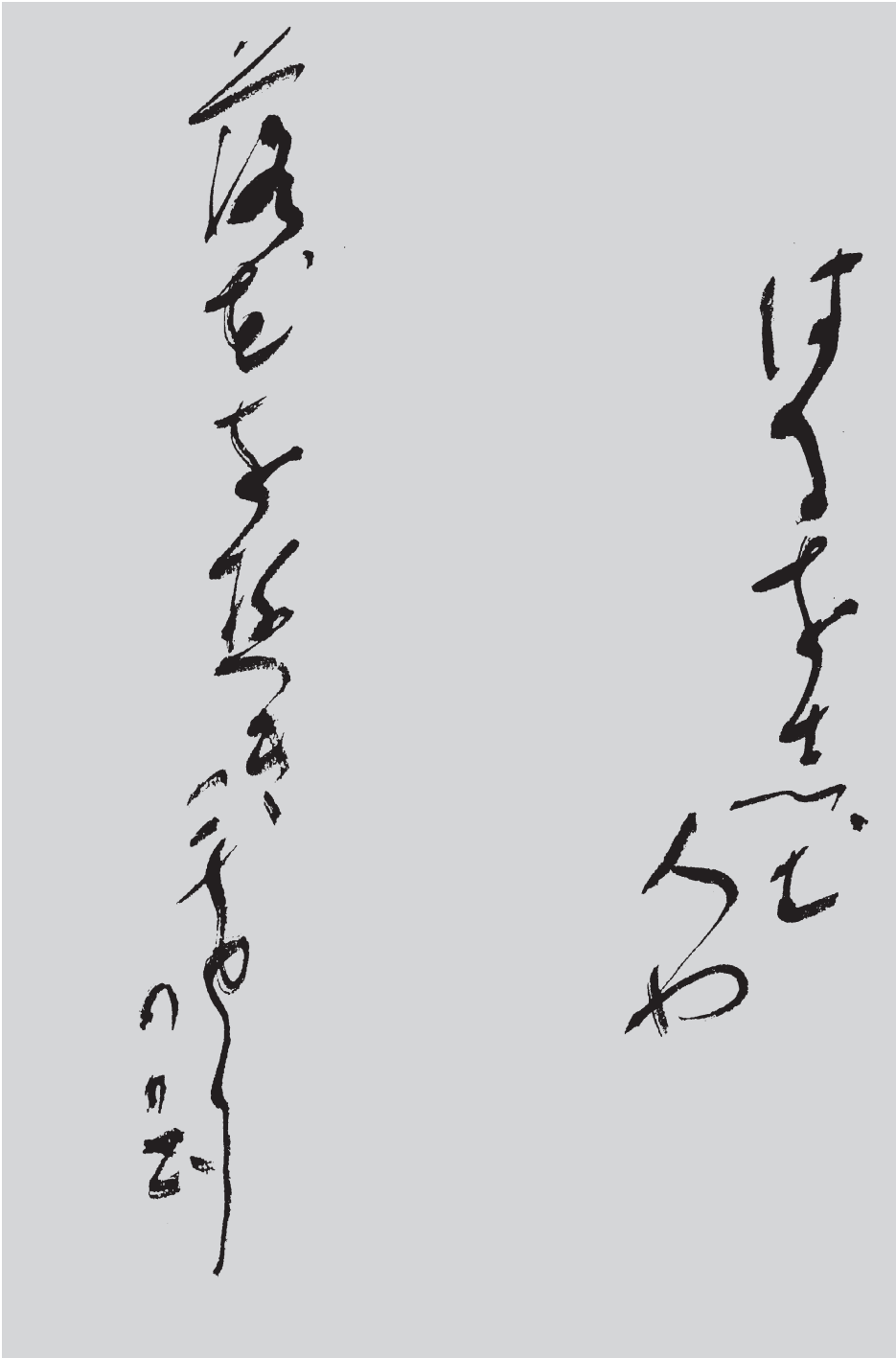
◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

平岡華雪先生書

春をしむ人や落花を行もどり (召波)
はるをしむ人や落花を遊き毛とり

〈墨継ぎへの一工夫を〉
墨継ぎの文字が明確ではありません。華雪先生がよく取り組まれている「筆書きか」と思います。改めて墨継ぎされる場合は、「遊」「毛」字が適切と思います。なお、連綿の区切りは、二字、三字の連綿です。事前練習にて、充分習熟されるよう切望いたします。

「毛」も毛



◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

加藤洞雪先生書

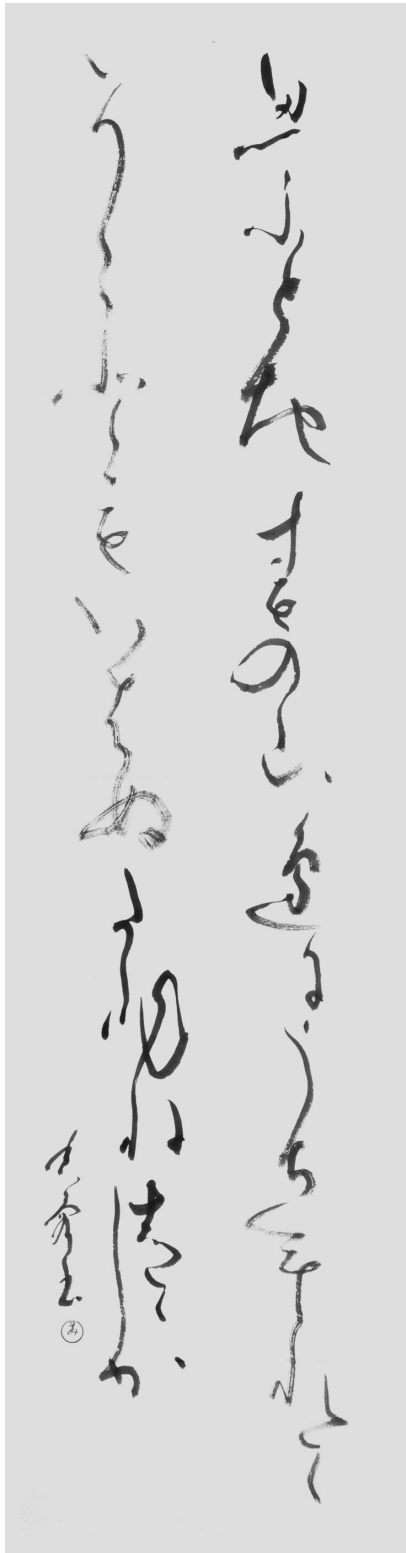
樓臺霽色千家日 楊柳春聲幾處鶯（陳伯康）
樓臺の霽色千家の日、楊柳の春聲幾處の鶯。



訳：多くの家の楼台には晴れた日がうららかに、春めいた鶯の声がここかしこの柳の間からきこえる。

川上香蓉先生書

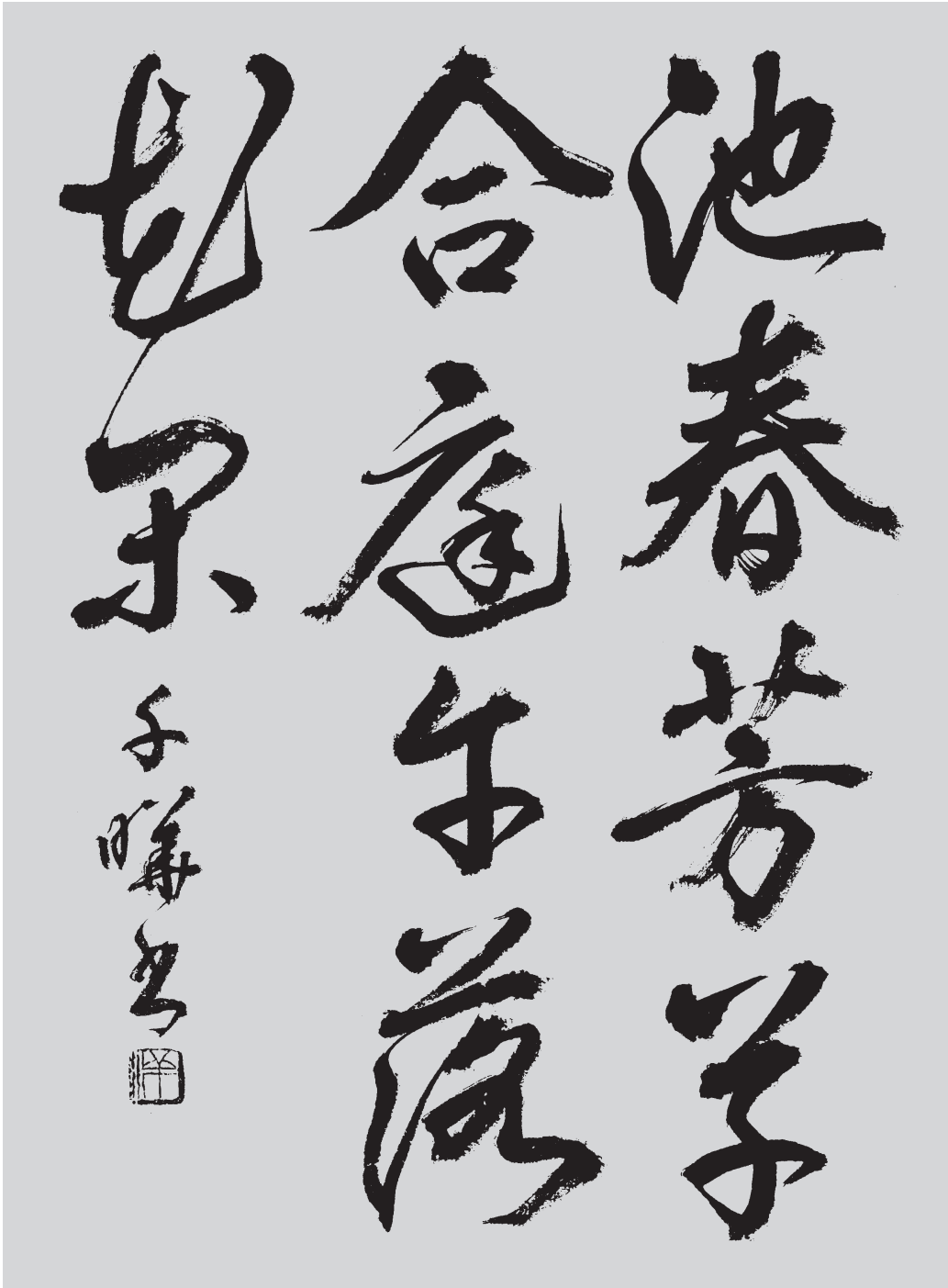
思ふどち春の山辺にうちむれてそこともいはぬ旅寝してしか（古今和歌集 素性）
思ふどち春の山邊尔うち牟れて曾こ登毛い者ぬ多非ね志てしか



◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

路 川 千 曄 先 生 書

池春芳草合 庭午落花閑（易恒）
池春にして芳草合し、庭午にして落花閑なり。

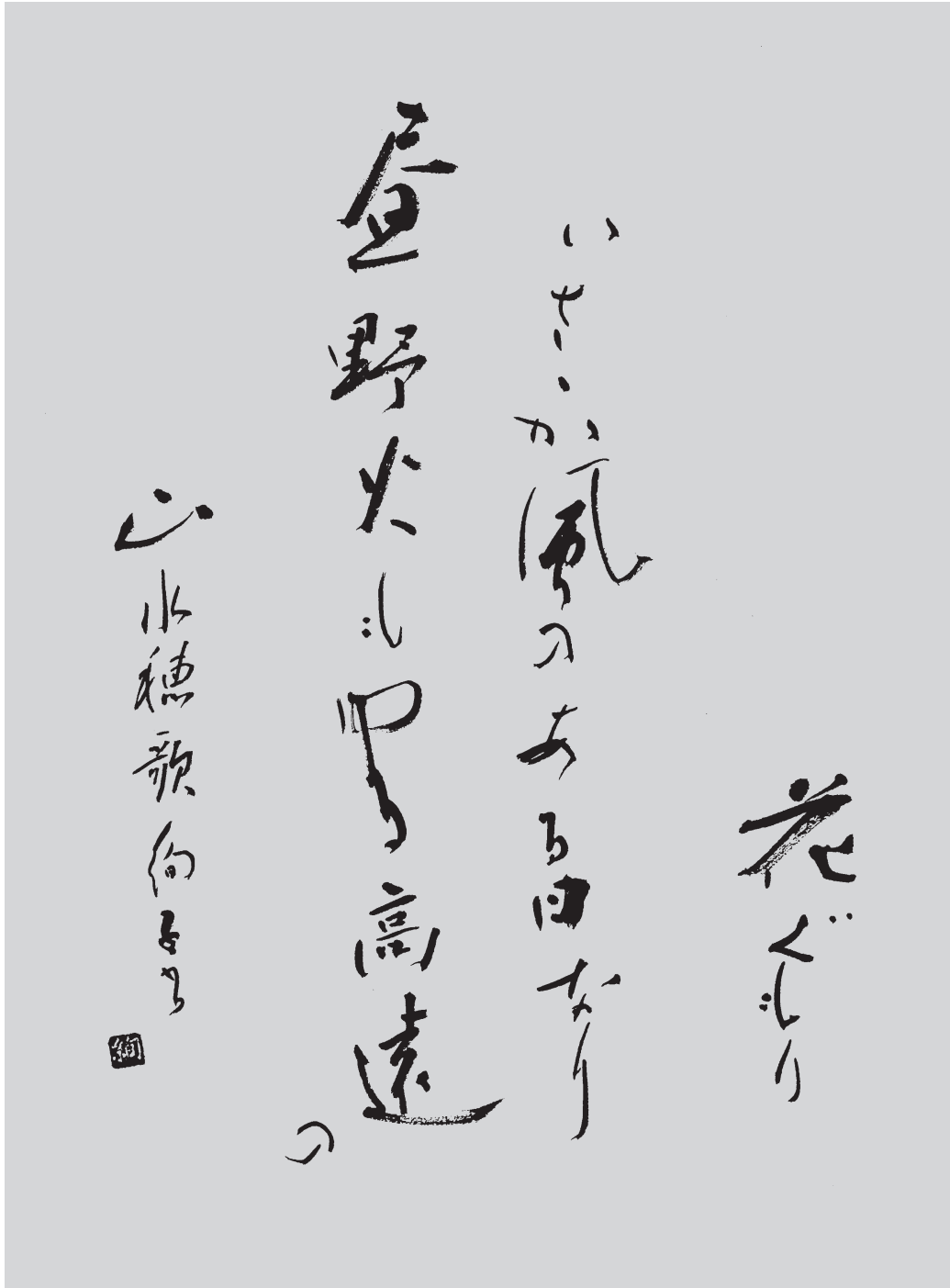


訳：池のほとりは春深く芳草は茂りあい、庭のさまはちょうど正午であって花がしずかに散っている。

◆注 意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

宮
絢子先生書

花ぐもりいささか風のある日なり
昼野火もゆる高遠の山
(太田水穂)
花ぐもりいささか風のある日なり
昼野火もゆる高遠の山



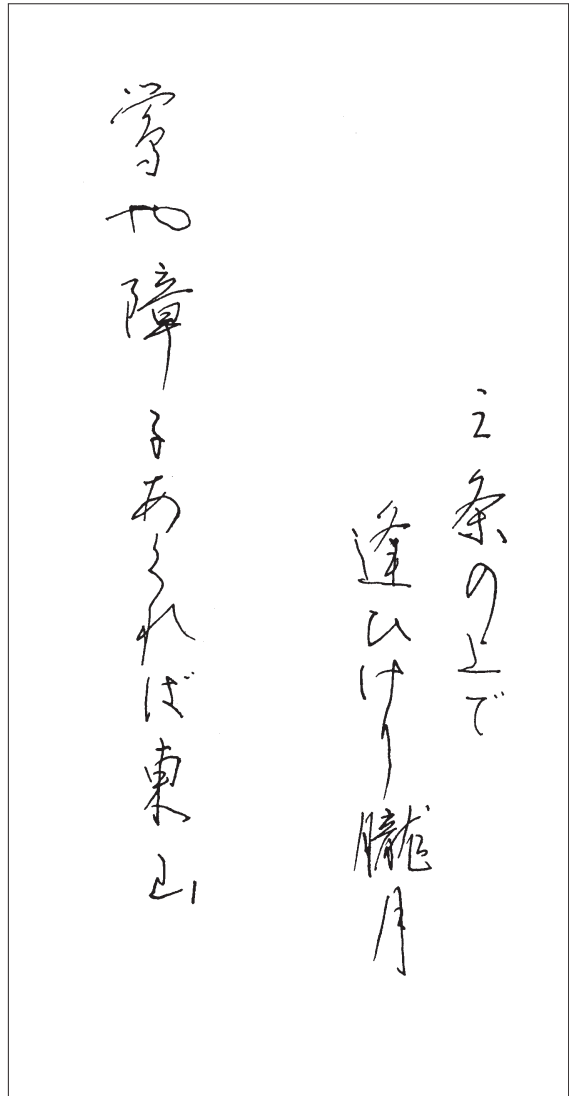
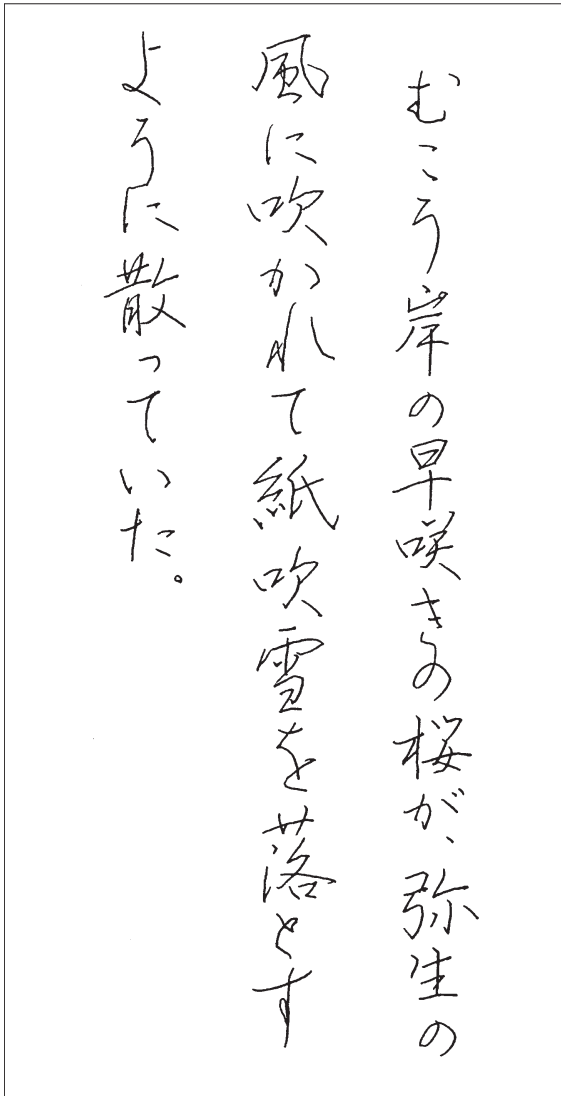
◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

松浦江波先生書

石原春香先生書

課題2 (初段階以下)

課題1 (初段階以上)



課題1 (初段階以上)

三条の上で逢ひけり朧月
鶯や障子あくれば東山

夏目漱石

◆注意

- (1) 自分の段級に合った課題を選択。
- (2) ペンまたはボールペン(黒色)を使用のこと。青インクは不可。
- (3) 段級欄は本人が記入(色は黒)。
- (4) はじめて出品される方は私製の紙(3×4 cm位)に次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。①硬筆部②支部名または都道府県名③氏名または雅号④新
- (5) 会員は無料・会員外は四三〇円

課題2 (初段階以下)

むこう岸の早咲きの桜が、弥生の風に吹かれて紙吹雪を落とすように散っていた。

「あづま橋」伊集院 静